

人間うらおもて

綴  
Pae

坂本龍馬

本・野好夫

人間うらおもて

新潮社版

人間うらおもて

図書印刷 神田加藤製本

昭和37年1月26日 印刷

昭和37年1月30日 発行

著者 中野好夫  
発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社  
東京都新宿区矢来町71  
電話東京341七一一〜九  
振替東京八〇八番

定価 二九〇円

落丁・乱丁がありましたらお取替えします。

© 1962 Yoshio Nakano printed in Japan

## ま え が き

どうも私の興味は年来人間にある。もし人に自然型、人間型とでもいうような型の分類が成り立つものであるとすれば、さしずめ私などは文句なしに人間型らしい。

早い話が旅行一つしてもである。車窓から見ると新しい風景、野山に生えた一木一草、さては朝夕の雲のたたずまい、風のいぶき、そうしたもののだけで結構旅の楽しさを満喫して、つきない興趣をおぼえている人もあるようだが、どうも私などは、そうしたものに風馬牛とまではいわないにしても、もつとはるかに興味を惹かれるのは、行く先々の人間たちの生態、社会関係、もの考え方といったような、いいかえればどこまでも人間臭フンブンたる事柄ばかりということになる。

そんなわけで、年来私は、別に系統立つてというわけではないが、とにかく政治家といわず、文人といわず、宗教家といわず、手あたり次第に伝記、自伝、回想録といったものを読んできた。書簡集、日記類もまたそうした意味で、私のもつとも愛読する種類の書物であった。

書簡といい、日記といい、もともとそれらはいずれも社会への発表を意図したものでない。そ

れだけにそこには、いわば書いた本人のふだん着の人間、身づくろいしない人間、不用意の人間というものが顔を出している。英語でいう *Self-betrayal*、自己が自己を裏切つて、われにもなく法衣の蔭から素顔をのぞかせているという奴である。

もともと私は、人間とはほとんど例外なく矛盾だらけ、撞著だらけの塊りだと信じている。そして人間お座敷向きの顔というのは、いわばその矛盾だらけの塊りの、ほぼ理性的な断面だけにすぎないと思う。信念とか、主義とか、世界観とかいわれるものはすべてそれだが、もちろん私は、それだから悪いとも、それだからすべて偽善だとも言っているのではない。それはそれとして立派に意義のある価値だと信じている。

だが、そうした主義、信念、世界観といったお座敷顔は、ときにはむしろそれを裏切る、自分でもどうにもならない矛盾相の存在によって、必ずしも傷つけられるどころか、逆にはじめて人間的魅力を加えられることさえ私は思っている。そうした意味でしばしば書簡、日記類にあらわれるふだん着の顔は、人間的興味として尽きないものがある。

もつとも中には、あらかじめすでに死後の公表をひそかに予想して書かれたとは思えない書簡、日記類も稀にはある。が、それはそれとしてまた面白いのである。つまり、そうしたあるいは後世をあざむくつもりかもしれない意識的計量そのものが、とりもなおさず本人の真の性格へのもつとも貴重な照明を提供してくれているからである。

前口上はこれくらいにする。したがって以下私の取り上げる書簡集、日記の主は、必ずしも文

人とはかぎらない。雑然と並んだ私の書架の中から手あたり次第、政治家のこともあろうし、軍人のこともあろう。学者もあれば、革命家もあろう。国籍もまた洋の東西を問わない。ありようをいえば、まだ全体の計画など少しも立っていない。かつて読んだ記憶の中から面白そうなのを拾い上げて、もう一度読み直してみようというにすぎない。せいぜいが炉辺雑談くらいにとっておいてもらえばいいのである。



目 次 —人間うらおもて—

まえがき	1
銭屋五兵衛	9
嘉村礒多・その書簡から	73
坂本龍馬・その書簡など	94
漱石とその門下生	116
提督ネルソンの恋	169
ポーの恋愛書簡をめぐる	206
あとがき	230



菱  
幘  
町  
春  
草

人間  
うらおもて



## 錢屋五兵衛

### はじめに

わたしが錢屋五兵衛について書くなどということは、およそお門違いに相違ない。そのために、一言はじめに断わって置く方が適當であろう。

外国文学というわたしの専門領域以外に、おりおりのわたし個人の関心として、内外人物の伝記書を、興味のおもむくままに買い集め、暇にまかせて読み漁るくせは、ずいぶん古くからあった。いつのまにか集まった本の中には、もちろん専門柄外国人のものが多かったが、中には日本人関係のものも、相当に上っていた。その中に、錢屋五兵衛関係のものも、その一部分であったわけ。

なぜわたしが錢屋に興味をもったか、別にはじめは深い理由があつたわけではない。わたし自身は関西の出身であり、したがつてもとより錢屋は郷党の人物ではない。が、同時に錢五は、わたしなど四国で育つたものにとつても、少年時代から、かなり親しい名前であつた。おそらく最

初は、そのころ祭礼などには必ず見られた、あのなつかしいのぞきからくりを通してではなかつたろうか。次ぎには、わたしなどの少年時代には、いまもう著者の名も忘れてしまったが、たしか七、八十ページばかりの少年読物として、銭屋五兵衛伝があった。少年用偉人伝叢書の一冊だつたと思う。そんなわけで、銭屋五兵衛の海上雄飛、そして例の河北潟中毒事件、銭屋一家の悲劇などについては、単純な形ながら、一応の知識と興味はあたえられていた。

もちろん銭五に対する評価が、当初の悪評から商傑へと、まさに百八十度の回転をしていた一時期の産物であり、したがって相当稗史小説的な要素も含んだ英傑銭五像ではあったが、ただいま憶い出しても考えるのは、例の疑獄事件の真相については、ようやく青年になりかかっていたわたしの心にも、なにか多少の疑いを感じさせていたように思う。そしてそのことが、結局後年のわたしの銭五への関心になつたのではないか。

次いで、これはもう二十年近くも前になると思うが、東京のある古書市で、加越能史談会というのから出ている籙木勢岐氏の「銭屋五兵衛」と、これも石川県図書館協会出版の「銭屋事件詮議留」と題する小冊子が、一くくりになつて出ているのを見つけた。当時一、二円ではなかつたかと思う。別に銭五研究のためというわけではなく、例のくせで買い求めたのであるが、卒読してみて、はじめて銭五の真生涯が明かになつたような気がしたし、またとりわけ今日の松川事件や菅生事件の裁判調書でも読むような「詮議留」の口書、その一問一答の尋問ぶりに、激しい興味をもつて引き込まれた。

その後、つい錢五関係の書物というと、目にふれるかぎり新版、古書を問わず、買って置くようになり、こんどこれを書くに当たって調べてみると、まことに不完全なものではあったが、相当地に活字文献はあつまっていた。そんなこともあって、おそらく五、六年も前であろうか、新潮社編集のN君と、なにかの雑談の折に、私観錢屋五兵衛みたいなことを一席しゃべってしまったものらしい。らしいというのは、もちろんそのとき錢五について書くなどの意図は毛頭なく、わたし自身その話のことは、完全に忘れてしまっていたからである。

ところが、どうしたことかN君は、執拗にそれを憶えていたらしい。こんどこの「日本文化研究」を企画するに当たって、藪から棒に「錢屋五兵衛」を割り当ててきた。おどろいて事情を聞いてみると、上述の始末なのだが、案外出版社としては素人の偏痴氣論を狙ったのかもしれない。当然かなりためらったが、考えてみればオダテに乗るも一法、この際一応私観錢屋五兵衛をまとめて見ようかという気にも、盲目蛇めくらになつた次第である。

もちろん、準備は不完全きわまるものであった。それにしても、曲がりなりにも本稿が成つたというのは、一に昨年金沢に赴いて、「錢屋五兵衛の研究」の著者鑄木勢岐、および「錢屋五兵衛」の著者である金沢大学教育学部助教授若林喜三郎の両氏に親しくお目にかかり、数日懇篤なる御教示に預かった上、また「年々留」写本の撮影を快く許された金沢市在住今村雪世氏、さらにまたはじめて現地を踏査したとき、いろいろと御親切を賜わつた金石町の方々の好意ある御示教がなければ、とうてい不可能事であつたろうと思う。

はじめに篤くそれらの産婆的御好意に感謝を捧げたいとともに、もとより「日本文化研究」と物々しく銘打つほどの新見解があるとも思わないが、ただもしわたしの五兵衛観が、不幸にしてこれら先輩研究者諸氏のそれと異なるものがあつた場合は、どうかこの上ともに寛容の芳志をもつて批判を願いたいのである。わたしとしては、ただこれら専門研究者諸氏の業績によりかかつて、わたしなりの銭屋五兵衛人間像を描き出そうとしたにすぎないのである。

## 1

はじめにまず型通り、五兵衛の略伝を述べる。

銭五こと銭屋五兵衛は、安永二年（一七七三年）加賀国宮腰町上越前町、やはり同じ五兵衛の長男として生まれている。幼名は茂助といったという。中央、江戸幕府では十代將軍家治の治世、ようやく悪名高いかの田沼時代がはじまろうとしており、藩侯前田家では第十一世治脩の時代だった。

銭屋の家系は、一応系譜資料によれば武士の裔ということになっている。遠祖は朝倉氏の後裔ともいい、その一人小岩某なるものは、すでに天正年間（十六世紀末）前田利家麾下の部将に仕えていたと伝えられる。だが、この主家の没落後、小岩某は、いちはやく帰農したらしい。そしてたまたまその帰農地が、能美郡清水村だったところから、以来清水をもってその姓としたもの

であるという。

小岩某から何代かの子孫、逆に本稿の主人公五兵衛から算えれば七代の祖に、吉右衛門というのが出た。これが縁あって金沢に出、さらに宮腰町に移り、ここで金銭両替商をはじめた。以来銭屋をもって屋号とし、いわゆる銭屋初代ということになる。寛文年間（一六七〇年代）のことであるという。

以後数代はさしたることもないが、第五代の五兵衛（主人公の祖父）というのが中興の祖などともいわれ、材木竹商を営んで家を興し、第一世五兵衛になった。この五兵衛には、はじめ実子がなかったので、養子をして嗣としたが、のち実子長男が生まれたので、これを分家して五兵衛を名乗らせた。二世五兵衛である。この五兵衛が非凡な商才の持主で、もともと家業の質両替業、また醤油醸造などのほか、手広く北海地方に海運業をはじめ、しばしば巨利を博したという。

その長男、三十二歳のときの子が、わが主人公五兵衛。そしてほかに、二弟が生まれている。

以上、型通りの家系を要約してみた。だが、別にこれに大きな比重をあたえるつもりはまったくない。強いていえば、代々商業、とりわけ金融を業としていたこと、そして海運業の如きは、わずかに父の代にやりはじめただけで、それものちには廃業しているくらいで、五兵衛と海上との宿縁は、むしろきわめて薄かった事実注目する程度である。また後年五兵衛の国禁外洋貿易の事業と関連して、武士の精神、気魄などという論者もあるが、直接父ないし祖父くらいの代ならしらず、二百年も前に帰農してしまつたというような武士の血が、五兵衛の代まで及んでいた



などという考え方は、かりにこの種の家系伝承をそのまま鵜呑みにするにしても、とうてい筆者には信じ難い。

次ぎには宮腰町という背景である。宮腰町、いまは金沢市金石町（たねいし）になっているが、その金石港がかつての宮腰の港である。旧金沢市から西北に約八キロ、犀川が日本海に注ぐあたり、いまでもとほけたような北陸鉄道の電車がやつとつないでいる取り残されたような町が、いまの金石町、旧宮腰町である。それから砂丘の海岸伝いに北すると、これまた数キロにして一時有名だった内灘砂丘、そして河北潟がある。

港といっても、それは日本海に吹きさらされた文字通りの河口というにすぎない。いまは護岸工事もでき上がって、埠頭なども一応はあるが、もとより港としてのかつての股賑ぶりなどしぶべくもない。蕭条として日本海の風の吹きすぎている忘れられた町である。だが、かつては加賀百万石の首都金沢の外港として唯一のものだった。いわゆる津頭として、少なくとも加賀平野の米を筆頭に、すべての物資はここを通じて出入された。これは五兵衛の晩年、嘉永年間の数字だが、宮腰の戸数一三七八というのがある。当時金沢をもってしてさえ人口八万ないし十万と推定されるのに対して、この数字は、表支閔宮腰の繁栄ぶりを察するに十分であろう。

これを要するに、五兵衛出生にいたるまでの銭屋一家は、本家、分家併わせて、相当の資産家であり、町の役職なども仰せつかる名望家の一つではあったが、いわゆる富豪と称すべきものはなかったように思える。とりわけ五兵衛出生の分家銭屋についていえば、祖父の五代五兵衛こ